

かなるは、だ、觸りが私達にはたまらぬ程懐かしい。手軽なる油繪具は表現慾強き複雑なる近代の心理に適應して、水繪具のテンペラはイタリーにも千五百年代には押しつけられ、歐洲繪畫は一般に光澤<sup>ツヤ</sup>光りするてらてらした油畫の畫面になつて了つた。水繪具のじみ沈んだは、だ、ときびとを今もなほ愛する日本人こそ、歐洲にすたれたテンペラとそれの兄弟である壁畫<sup>フレスコ</sup>の技巧傳統を、あるひは少くともその氣分を正當に感受し得るものではなからうか。私は高蒔繪のやうなポチチエリの「春」の繪の花のかき方を見ながら、さう思つた。またビエロ、デラ、フランチェスカの繪を見ながら、これこそ古土佐の巻物の趣味上の貴族の味を大きく行つたものだと思つた。私は日本の畫かきがバリーへ行つて、印衆派<sup>インシュ</sup>以後の色の多い油繪を習つて歸るばかりでなく、少しは靜かなイタリーの山の町にでもこもつて、テンペラの純ほく沈重なる味に打ち込む者があつていいと思ふ。厚板の上に丹念なる下塗りをして、そして金ばくを張り、あるひは盛上げをして、そして筆をつゝしみ愛して、せんさいにかく、かけば色は下塗りの白壺<sup>チヤム</sup>に沈み込んで、しつとりと薄霞むかのやうな遠い氣持の出るテンペラ畫の古法が日本にまるで傳はつてないが故に、畫家はひたむきに油畫に赴くとも考へられるのである。

### ③ 長谷川路可の留学

長谷川路可(本名龍三)は大正十年三月本校日本画科卒業後直ちにヨーロッパへ私費留学。主にフレスコを学び、ベルリン中央アジア探險隊採集壁畫の模写に従事した。留学に際し、本校は「仏蘭西国

及英吉利国滞在中東洋古画ノ調査ヲ囑託」した(「大正十年職員關係書類」)。

### ④ 戸部隆吉死去

大正十年三月二十五日、東洋美術史授業担当助教戸部隆吉(号隆古)が死去した。仏教美術史研究に没頭し、業半ばであつたため、夭折を惜しむ声が高かつた。月報第二十卷第一号に追悼記事と肖像写真が掲げられており、略歴も紹介されているが、彼は洋画家になるつもりで上京して和田英作のもとに寄寓し、また、白井雨山宅にも出入りしたりして明治三十九年四月本校日本画科に入学、十四年三月卒業した。在校中は結城素明宅へ塾生同様に足繁く通い、素明を介して柴崎恒信、平子鐸嶺らと知り合い、また、素明の友人加藤咄堂が主幹をつとめる『新修養』や高島米峰らの同人雜誌『新仏教』の挿絵を描いた。本学芸術資料館には卒業制作「枇杷と露の臺」(本書第二巻口絵参照)が収蔵されており、画才も豊かであつたことが想像される。卒業後暫くの間、平福百穂の下宿に寄宿し、



戸部隆吉

のちに百穂の紹介で『秋田魁新聞』その他に挿絵を寄稿した。明治四十四年七月青森県立弘前中学校教諭となり、次いで大正二年九月より同五年一月まで三重県立第三中学校教諭をつとめた後、東